

早川二郎譯

考古學概論

本書は題して『考古學概論』といふが、その實は論文集である。ソヴィエートの言語學者エヌ・ヤー・マルの學界における四十五年を記念するために國立物質文化史學院が編纂した論文集——それから譯出されたつぎの諸論文からなつてゐる。

まづ各個の論文をその「方法論」の具體的なサンプルとしてうけとらなければならぬ。もちろん、おのおの方法の上に若干の小異をもつてゐるが、共通する根本の態度はなほだ顯著である。すなはち、いはゆるマルクス・レーニン主義の史的公式に物質的記念物——普通わが邦の考古學界でつかはれてゐることばをもつてすれば遺物・遺跡——をあてはめようとする態度である。この態度に對してはわれわれもたゞちに賛成するわけにはゆかない。しかし、遺物・遺跡が偶然の所産でなく、歴史的必然性をもつものであり、また個人的なものでなく、社會的な所産であることを認め、したがつてこゝから人類社會の史的發展をひき出さうとする態度はまづ正しいといはなければならぬ。「もの」それは當然に生産技術を反映する——生産技術は天才をもふくめて社會的なものである——そしてまた生産の諸關係を反映する、また分配・消費といふことについても當然そのものに體現されてゐることは疑ふべくもない、そしてまたこれを要求したるもろの社會關係やイデオロギーをも反映してゐることは申すまでもないことである。從來とてもその宗教的乃至藝術的イ

デオロギーについてはかなり注意せられてゐたのであつて、たゞそれをおしひろめさへすればよいのである。きれぎれであつた考古學者のいはゆる「考察」を組織するものにしなければならぬ。「もの」に沈湎してその背後の歴史を無視したのは考古學者の怠慢であつた。考古學者は何よりもまづ歴史家でなくてはならない。けだし、本書の譯出は時宜に適したものであり、本邦考古學者の反省を促すことが少くなくからうと思ふ。

しかし「もの」が歴史的・社會的必然性の所産であるとしても、この「もの」から逆に、反映した筈の社會的諸關係およびもろのイデオロギーをひき出すことは技術的に決して容易なことでない。さて蘇聯の考古學者たちはこの點においてどこまで成功し得たであらうか。わたくしは特にシベリアをとりあつたふたつの論文についてそれを吟味して見たいと思ふ。

ソスノフスキーはバイカル地方の新石器時代の生業を論じてかなりの成功を示してゐる。ウエルフネウヂンスク附近のベルゾフカ住地、トロゴイ墓地、サヤンツイ墓地にて小鹿・赤鹿・ロー鹿・ロツス鹿・猪・兎・馬・牛・羊・馴鹿・犬などの獸骨や魚骨・魚鱗・淡水産の貝

が出土したのをあげ、これが東部シベリアの森林・半森林地帯に通行であることを指摘し、かれらは定着的な漁者であり、獵夫であり、また若干の家畜飼養者でもあつた、かれらは農業を排除したが、食用植物の採集はやつたと見え、すりつぶし道具の石臼や石棒、土器片にのこる織物の跡などがあると説いた。かれらはなほ小さい聚團——ソスノフスキーは進んでいふ——をなしてゐたにすぎず、經濟的單位としては主要生産手段の共有、共同の勞働、生産物の共同消費をなす民族共產體であり、家族的にはパトリローカルな結婚形態であつた。墓地における夫と妻との埋葬、家長と數人の妻、乃至奴隸との埋葬は漁業・狩獵の發達及び牧畜の出現に伴ふ男子の意義の増大を物語る。かれらは生産活動のために協業、生存闘争のために團結したが、一方既に生活過程の個人化の前提として弓矢・投槍・銚・鈞針・家畜などが存在した。そして最初の青銅器、および家畜の發生——これらはともに南部シベリアの草原地帯から將來された——とともにこの森林地帯にも個人的生産、そして財産懸隔の増大が見られた。また白色玉・青銅器・海産眞珠・貝殼・海象の牙などは當

時の南方シベリアとの、またアジア極北との交易を表示するといふ。行論に飛躍が少く具體的な問題だけに何人もその推理の穩當さを思ふであらう。しかし、前半の生業論の充實してゐるのに比すると後半の諸社會關係とその發達を論じた部分はやく空疎な感を免れない。こゝに示す程度の協業や交易すら存在しないといふ社會は一體考へられるだらうか。協業や交易が存在するといふよりはどんな協業や交易が行はれたといふところにいつも問題がよこたはつてゐるのである。財産個人化の前提としての弓矢・投槍・銚なども新石器時代のその最初の始めにまで遡り、また舊石器時代にまで遡る。舊石器初の拳クイ・ド・ボツレ石ボツレでさへ個人的な利器でしかない。それらとの間にどれだけの相違があらうか。またこゝに使用されたパトリローカルな結婚状態といふやうな社會關係がどうして遺物からひきだすことが可能であらうか。ほそほそとした聯想の繼起を綴りあはすのならそれはまだ未熟だといはざるを得ない。

この傾向は上部構造を取扱つたゴリムステンのものである。かれは北方民族が青銅器時代から鐵器時代の初期にかけてもつたいはゆる「動物

「意匠」をとりあげ、その呪力の變遷とそれに應じた「實はそれをひきおこした社會の變遷とを論じた。かれによれば第一のキムメル期はアフアナシェフ、アンドロノヴァ、カラスク文化がこれで、その終末期に寫實的な動物意匠があらはれる、それは牛・羊・山羊・鹿などをふくみ、小刀・短劍の末端に附く、第二のスキート・サルマート期にはミヌシンスク古墳文化、バズイリツク古墳文化が代表し、動物意匠は豊富になり、多様化し、牛・羊・山羊・鹿のほかには麋・馬・豹・鳥などがあらはれるとともに、その適用範圍も擴大されて青銅鏡や青銅釜にも施される、より後期になつて益益多様な幻想的複合的動物意匠が出現し、鞍や馬飾りに適用され、つひに第三のフン期にまでおよんでそれは葬具に使用されるに至つた。すなはち、第一段階には生産的トートテム呪力としてあらはれ、定著的半農半牧を基礎とする民族制の發展とともに祭祀的トートテム呪力となり、第二段の氏族制崩壞、階級の發生期においては民族間の鬭争が激化し、幻想的・複合的動物意匠、就中鬭争意匠、實は咬獸意匠が次第に軍事的呪術として表現されるに至つた。それとともに幻想化され

た獸は保護の祖神になり神話化され、つひに第三段階の半遊牧的封建國家の成立とともに動物意匠は次第に紋章的になつて、變質していつたのである。この論文に至つては未熟といふよりはむしろ理論的混亂があり、獨斷さへ諸所に見受けられる。動物意匠に呪力觀念の變遷を見ようとすることは正しい。しかし咬獸意匠 *Biting animal* が軍事的呪術にもとづくとは認め難い。互角の鬭争意匠もあるけれども、咬まれてゐる動物には概して家畜が多い。家畜保護に關する牧畜呪術と見るべきである。こゝにこそむしろ思惟の生産への完全な從屬が認められるのではなからうか。唯物史觀としても理論的に整備したものではない。

元來、こゝに收められた論文はマルに獻げられた記念論文であるとともにまた寄稿者はほとんどマル派の學者であるらしく、みなマルの言語學説を考古學、すなはち「もの」で立證しようとし、またそれを明言してゐる。マルの言語學説は要するにインド・ゲルマンの傳播説に對して、段階發達説で、この點も各論文の根本的態度になつてゐる。この段階發達説は實に唯物史觀に近く、蘇聯の諸考古學者がこの點をまねて力説し

たのはまた故ありといふべきである。譯者はマルの言語學說一般を讀者に諒解させるために『ソヴェート大百科辭典』メンチャニコフ等執筆の「ヤベテ言語學」を譯出附載するの親切を示してゐる。

(菊判三二四頁、昭和十年五月白揚社發行、定價二圓五拾錢)

(水野清 一)